

本を選ぶ

NO.414 2019年(令和1年)11月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

- <くろん・ぼわん>泉鏡花の劇世界
- 大学教員ノート 第2回
- 塩野直道と「緑表紙」算数教科書の展示会
- 過去を受け継ぎ、新しい価値を生み出す
- 科学の魅力を伝えるために

●●●●●くろん・ぼわん●●●●●

泉鏡花の劇世界

今年、没後80年を迎える作家・泉鏡花の作品は、文学としてはもちろん、新派や歌舞伎など様々な舞台上で上演され、愛され続けている。

鏡花は明治時代半ばから創作活動を始めるが、それは新しい演劇「新派」の発展の歴史とも重なる。芝居といえば歌舞伎しかなかった江戸時代から、明治新政府となり、文明開化の波が押し寄せた演劇界には、歌舞伎とは異なる新しい芝居が芽吹き、新演劇運動が盛んとなる。これらの演劇を、歌舞伎の「旧派」に対し、「新派」と呼称したのである。そんな時代のなか、鏡花の小説が劇化されたことが、鏡花と新派の縁の始まりであった。

鏡花の作品は主に『歌行燈』などの芸道もの、『日本橋』などの花柳界もの、『海神別荘』などの神秘的・幻想的な作品の三つに分けられる。

新派は鏡花の作品を次々と上演し人気を博していくが、相性が良かった理由のひとつとして、芸道ものや花柳界ものが、新派の持ち味とピッタリ合ったことが挙げられるだろう。

とりわけ新派の名優・初代喜多村緑郎は、鏡花の描く花柳界に生きる女の姿を、リアルに、また抒情的に体現する存在であった。喜多村は『婦系図』など鏡花作品を舞台化するなかで、新派女方

の芸や演出法を確立していく。鏡花もまた、小説『日本橋』を自ら戯曲化するなど、作品づくりにおいて新派から影響を受けていく。現在まで続く新派古典の名作の数々は、こうしたふたりの交友の賜物である。

しかし鏡花作品三つ目の系統である幻想的な作品群は、その世界観を舞台化することが難しかったためか、なかなか上演される機会は訪れなかった。大正2(1913)年に戯曲形式で発表された『海神別荘』が初めて新派により上演されたのは、鏡花没後16年も経たず昭和30(1955)年であった。その後、新劇や歌舞伎では度々上演されるようになるのだが、新派の持ち味とはやはり異なったからだろうか。それ以降、新派のレパートリーとはなっていない。

さて今夏の『海神別荘』を、女性だけの劇団「OSK日本歌劇団」が『歌劇 海神別荘』として上演した。鏡花の神秘的でロマンティックな世界観を、歌と踊りでファンタジックに魅せる素晴らしい舞台だった。このような作品は、写実主義の新派よりも、幻想世界を美しく演じるOSKのような劇団のほうが向いているのだな、と実感した。

今後もOSKをはじめ、様々な劇団による新たな展開に期待していきたい。

しかし最近では時代の流れか、新派でも『日本橋』などの花柳界ものの上演が少なくなりさみしい限りだ。やはり新派には、『婦系図』や『滝の白糸』といった鏡花の古典名作を上演し続けてほしいのである。(ささきえり)

大学教員ノート 第2回

—「学びの共同体」—

石川 敬史

太陽が沈み、辺りが暗くなる時間がなんだか早いように感じる季節がやってきた。日中は暖かく空も穏やかな日であっても、朝晩は冷え込む。今朝も肌寒いのか、と出勤間際に一瞬立ち止まる季節でもある。寒くなると感じ始めたこの季節——ともに学びあう大切さを改めて痛感する季節でもある。

*

企業の方々との打ち合わせ、学生同士の意見交換、豊かで斬新的な着想の具体化と言語化、学生によるプレゼンテーション・提案発表会、そして企業の方々による講評——毎年5月から11月頃にかけて地道にコツコツ歩む活動が石川研究室で広がる。2013年度から取り組み始めた活動であるため、もう今年で7年を重ねている。もちろん、毎年必ずしも順調な道のりを歩むとは限らない。なかなかアイデアが出ない瞬間、話が脱線して盛り上がるひと時、多くの作業を学生に丸ごと任せてしまう月日、企業の方々のイニシアチブに頼ってしまう時期などもあった。毎年、道を迷いながらともに前に進んできた。

*

ある年は、誰でもわかりやすく・楽しく、図書館の蔵書検索システム（OPAC）を知ることができるガイダンス動画を制作した。手話、ナレーション、シナリオ作成は学生、動画編集はA社の方々を担当、主に聴覚に障害のある方々を念頭に制作した。A社の方々とともに、先行事例の分析、聴覚障害者情報提供施設への見学、さらには学生が講師役となり手話をともに学んだ。ある年は、人型ロボット・PepperとOPACとの連携に挑んだ。まずPepperを知ることから始まり、何ができるのか・何をしたいのかをともに考えた。具体的な企画案を学生が提案し、ともに推敲しあい、最終的にPepperへのプログラムの実装はA社が担当した。ある年は、若者の読書離れに危機感を抱き、スマートフォンで操作できる読書推進アプリの企画を進めた。先行事例に束縛されることなく、学生がアプリに実装したい機能を自由にのびのびと提案した。提案内容の一部はA

社のアプリに実現されている。ある年は、B社とともに、オリジナルのブックトラックづくりに挑戦した。ブックトラックの使用目的や存在意義、デザイン・色彩についてはB社の方々から学び、ここから刺激を受け、デザイン案を学生が提案した。休日にも関わらずB社本社とともに語り合った時間は忘れることはできない。この翌年は、A社も加わり、A社、B社と学生らとともにブックトラックづくりに挑んだ。A社本社にて役員の方々を前に、オリジナルブックトラックの発表会を行わせていただいたことは今でも鮮明に覚えている。そして今年度（2019年度）は、A社とC社とともに、読書手帳づくりを楽しく進めている。

*

A社とは、こうした石川研究室との産学連携プロジェクトに限らず、これまでに司書課程科目と連携した取り組みを積み重ねてきた。代表的な事例は、実際にA社の図書館業務システムを使う演習授業である。目録作成に限らず、図書が発注・受入・登録と、利用者登録・貸出・返却という流れを体感する。未来の図書館システムを学生が自由に企画提案し、A社の方々から講評をいただいた授業もおこなった。ときには、A社の方々も学生の輪の中に入りグループワークを展開した。A社のほかにも、B社、D社に勤務し、司書資格を有する女性を授業にお招きし、転職も含めたこれまでのキャリアを語っていただいたこともあった。

*

こうした産学連携プロジェクトに、毎年、石川研究室の3年生は参画することになっている。Eさんは、3年次、さらには4年次においても積極的にプロジェクトに関わった。仲間への心配りを忘れず、プロジェクトを笑顔でまとめている姿が印象に残っている。今は情報システム系の会社で活躍している。Fさんはデザインが得意で、ブックトラックを独創的なデザインで描きあげた。遠距離通学していた学生である。とても人気のある

このブックトラックは、A社の図書館システムを導入した全国の大学図書館で活躍している。Fさんも情報システム系の会社に就職した。Gさんもブックトラックづくりに参画した。今でも年に1回ほど研究室にひょっこりやって来る。彼女も情報システム系の会社に勤務している。Hさんは行動力と熱意のある学生で、Pepperの企画立案の際には、まさに全速力で走り抜けた。念願の家具・什器系の会社へ就職した。Iさんも、HさんとともにPepper企画の中心的人物であった。行動力のある学生で、とにかく計画的に物事を進めていく学生であった。みごと難関を突破し、地方自治体の保育士として仕事をしている。この他、データ解析が得意なJさん、電子書籍に関心があったKさん、語学が堪能で公務員になったLさんなど——もちろん、産学連携プロジェクトに関わっていなくても、石川研究室に出入りする学生を思い出す。

*

ここに刻んだ学生——司書課程を履修している個性豊かな学生であった。司書課程は全学科で履修できるため、私が所属する文芸文化学科以外の学生も、ふわりと石川研究室に集まってくる。

*

産学連携プロジェクトには、学生の学びあいと同時に、企業の方々の学びあいも内在している。とりわけ、長年積み重ねられたA社との産学連携プロジェクトを通して、数多くのA社の方々と出会ってきた。営業を統括され重責を背負いながらも、いつも笑顔で話しかけていただくバイク好きなMさん、全国各地を飛び回りつつ、私が勤務するような弱小女子大学での産学連携プロジェクトの旗を社内で振ってくださるジョギングが趣味のNさん、とある年のプロジェクト進捗中にめでたくご結婚なさり、高貴な苗字へ変身したOさん、横浜での図書館総合展の会場内で学生と間違えて私が声をかけてしまったPさん、映像制作・機器操作のプロを自負し私たちを支えてくださるQさん——紙数の関係でA社のすべての方々をご紹介できないのが残念であるが、

単なる一教員にすぎない私のわがままに対して常に真摯に耳を傾けてくださることに、とにかく感謝の言葉しかない。

*

司書課程の授業内で、各企業さんによる図書館システム提案会の実施——勤務する大学で図書館システムをリプレイスする時期に、80人近い学生を前にプレゼンしていただいたこともあった。A社のRさんは、これまでに見たことがないような緊張した表情で、寒い季節なのに額から汗を流しながら熱く語っていたことを思い出す。真剣で熱い提案を学生が必死に読み解いた。後に、この場面が最も印象に残っていると語る学生と数多く出会った。いぶし銀の営業スタイルのRさんも、このとき、多くのことを学んだと後に熱く語っていた。

*

正しい答えのない問いに対して、学生も企業の方々も、ともに考え、協力しあいながら楽しく前向きにプロジェクトが進められていく。企業の方々は学生のアイデアを引き出し、学生のアイデアは企業の方々を大いに刺激する。所属や役職、年齢、立場をこえて、さまざまな考え、価値観、方法、物事の見方が相対化されていく。うまくいかないときは、束縛せず、背伸びをせず、無理に道をつくろうとせず、お茶を飲みながら等身大の気持ちで語りあっていると、複数の道がみえてくる。

*

10月下旬になると学園祭をむかえ、社会という荒波の中で過ごしている卒業生が戻ってくる。そして目の前の仕事や生活の悩みを自分のコトバで語り始める。聴きあい、手を差し伸べ、ともに学び、他者とともに謙虚に生きる——私からは、ささやかではあるが、教育学者・佐藤学による「学びの共同体」のビジョンと哲学を静かに語る。佐藤学『学校を改革する：学びの共同体の構想と実践』（岩波書店／2012／岩波ブックレット842）である。そして語りながら、私自身の姿勢も正している。

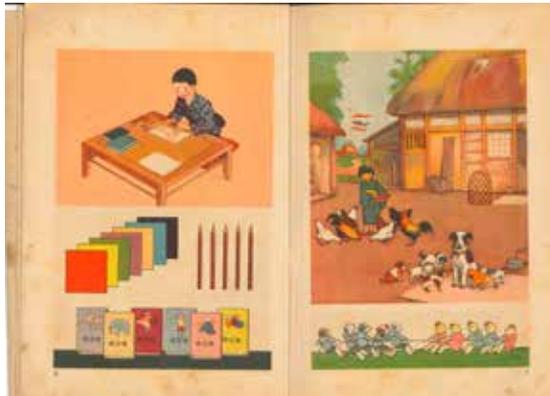
（いしかわ たかし：十文字学園女子大学）

塩野直道と「緑表紙」算数教科書の展示会

菅 修一

筆者は『伝説の算数教科書<緑表紙>』（岩波科学ライブラリー 2007年刊）の著者松宮哲夫先生と共に金沢大学資料館で開催された企画展「塩野直道と『緑表紙』—金沢高師第2代校長と伝説の教科書—」（一般社団法人理数教育研究所と共催、2019年7月5日～8月23日）を8月5日に見学。松宮先生は20年以上前、大阪教育大学附属図書館勤務時に筆者が企画した算数の教科書展を監修していただいたことから今も交流して下さっています。

塩野直道（1898-1969）は文部省図書監修官時代「緑表紙」を編纂した人。1935年から1943年まで使用された国定算術（注：当時は算数を算術と呼ぶ）教科書の表紙が緑色だったことから「緑表紙」という愛称で呼ばれました。「緑表紙」はそれ以前の黒表紙算術書を刷新したので高い評価を受けました。



I. 緑表紙

1. 絵本の教科書の原点

皆さんが小学1年入学当初に使用された算数教科書は可愛い動物や美味しそうなお菓子が描かれた絵図ばかりだったでしょう。その始まりとなったのが、「緑表紙」の第1学年児童用の上巻です。展示会場では紅白の玉入れ、鶏に餌をやる女の子・親犬を囲む子犬の風景・擬人化した犬と鶏との綱引きなどの絵図（上掲図参照）を通して入学したばかりの児童が数を数えるということを学んでいたことを知ることができました。また、「緑表紙」の絵図や挿絵を描いた多田北鳥（1889-1947）が著した『尋一算術書の絵を語る』（モナス 1935）が展示されていました。「緑表紙」の絵図や挿絵は魅力あるもので多くの方が多田の考えを知りたいと思ったため出版社員聞き書きで刊行されたのです。多田はキリンビールのポスターも手がけた当代一

流のグラフィックデザイナーでした（『伝説の算数教科書<緑表紙>』 pp. 72-73）。

2. 四つ珠そろばん

近頃は計算も電卓やパソコンになり、そろばんを使うことも少なくなりました。でも、筆者が小学生だった頃はそろばん塾に通ったものです。その際使用したそろばんは四つ珠でしたが、「緑表紙」が使用されるまでの昭和の初め頃は「五つ珠そろばん」が主流でした。「緑表紙」の第4学年教師用に授業で使用するそろばんについて「珠の数 天一顆地四顆」と決められたことから「四つ珠そろばん」が普及したのだとの説明がありました。塩野の決断です。

3. 数理思想

絵本のような算数教科書は算数の学習に入っていくやすいのですが、他

方、4年以上の「緑表紙」は難しいという評判もありました（『伝説の算数教科書<緑表紙>』 p. 92）。展示会場では6年生の教材「地球」という問題を紹介していました。地球を半径6370kmの球と考えた上で、飛行機が赤道上で5000mの高さを保って地球を一周するとすれば、この飛行機は赤道の周囲よりもどれだけ長く飛ばなければならないか。一時間300kmの速さで飛ぶ飛行機なら一周するのに何日何時間かかるか。そのような趣旨の問題でした。算数に地理や理科の視点も加え、数理思想を育てる総合学習問題だと松宮先生はおっしゃいます。3年の教材には順列や組合せ、5年には確率、6年には極限に関する問題もありました（『伝説の算数教科書<緑表紙>』 pp. 78-80, 85-86）。

II. 金沢高等師範学校

1. 金沢高等師範学校の設置—1944年3月

戦前の中等学校教員養成機関として高等師範学校（高師と略す）が4校あるのを筆者は知っていました。即ち東京（現・筑波大）、広島（現・広島大）、東京女子（現・お茶の水女子大）、奈良女子（現・奈良女子大）。しかし金沢高師は知りませんでした。金沢高師は1944年3月に設置（翌年4月岡崎高師設置）。当時、多くの中等学校教員が出征していくので教員が不足、理数科系教員の養成に特化しての設置でした（のち文科の卒業生も2回出す）。1952年3月閉校。第四高等学校、石川師範学校、金沢医科大学等とともに金沢大学となりました。

2. 金沢高師校長としての塩野直道の使命

塩野は1945年6月、金沢高師の校長に就任。校務のほか次の使命がありました。

第一「特別科学教育研究室長」（1946年6月）として北陸3県の小・中・高の現場教員の指導力増強のための活動を行うこと。期間は3か月、各20名。

第二「特別科学学級」（1944年12月）も設置。文部省が「科学に高度の天分有する」児童・生徒を国民学校4～6年、中学1～3年の各30名を選抜し、高師教官が特別カリキュラムで指導するものです。高師では東京、広島、金沢、東京女子の4校および京都帝国大学（京都一中、京都師範学校附属国民学校）で実施¹⁾。展示には1946年5月入学記念写真があり、塩野校長、現職教員20名、児童（4年生）14名の計35名が写っています。中学生は写っていませんが、東京高師附中1～3年生約60名が金沢へ集団疎開（1945年5～8月）して指導を受けました。この特別科学学級は1947年3月廃止、約700名が学びました。

3. 短期間だった金沢高師校長時代—教職追放（1946年12月6日）

1946年3月米国教育使節団来日するとき塩野は日本側教育家委員会29名の1人に就任。第三分科会で日本の教育制度再編成・六三三四制に最後まで反対、これが教職追放（同年12月6日）の一因となり休職、1947年7月25日退職しました（同年12月公職追放）。塩野の追悼文集『随流導流』（新興出

版社啓林館 1982）には学生たちが校長追放解除のため東京に陳情団を派遣するなど懸命に運動した旨書かれていました（pp. 327-330、など）。塩野は学生から慕われていたのです。金沢高師同窓会誌『無限』創刊号（1947年3月刊）の展示もあり、塩野の一文も掲載されていました。

III. 金沢高師退職後の塩野直道

塩野は教職追放後、アメリカ流単元学習により学力がレベル低下したので、それに反対、系統学習によりレベル向上につとめました。1951年からは大阪の教科書出版社・啓林館で彼が亡くなる直前まで（1969年4月27日）小学校の算数、中学校の数学教科書編纂に携わっていました。松宮先生は塩野の晩年に中学校数学教科書編纂に加わり、塩野に直接指導を受けたとおっしゃいます。展示会場にはそれらの教科書が並んでいました。

IV. 紙芝居「塩野直道ものがたり」

塩野の出身地島根県出雲市では「塩野直道顕彰会」（2018年）が組織され講演会や塩野文庫を設けるなど熱心に活動をされています。塩野の母校である出雲市立長浜小学校かるたクラブは元同小学校の教員だった方などの助けを受けて紙芝居「塩野直道ものがたり」を作成しました。子どもたちが描いた水彩画の絵に台詞を付けて、塩野の生涯を辿っています。今回の展示では、この紙芝居が塩野直道顕彰会によりDVD化され繰り返し上映されていました。

V. 終わりに

資料展示会に出向くと、思いがけない事実を知ることになり、新たな資料を教えられます。「緑表紙」のことも塩野直道のことも一応は知ってはいたのですが、金沢大学資料館の展示を観て、塩野直道の金沢での活動、当時の学生との交流を垣間見ることができ、新たな発見がありました。

本稿作成にあたり、松宮哲夫先生に多くのご教示をいただきました。記して感謝いたします。

（すが しゅういち：花園大学）

* 参考文献1)：藤岡由夫『科学教育論』（教育文庫7）pp. 93-111（河出書房 1947）

過去を受け継ぎ、新しい価値を生み出す

—「動く出版社」フィルムアート社の歩み—

大場 健

フィルムアート社は、1968年に雑誌『季刊フィルム』創刊のために設立された出版社です。東京・赤坂にあった草月アートセンターを母体とし、映画、美術、音楽、舞踏など幅広い領域の前衛芸術を発信する活動が基盤となっています。たとえば、映画祭を催したり、海外から現代美術家やパフォーマーを招聘したり、映画監督ジャン＝リュック・ゴダール作品の配給・上映を行なったりと、本づくりにとどまらない活動を行なってきました。

フィルムアート社設立の発起人は、松本俊夫、勅使河原宏、山田宏一などの映画人をはじめ、中原佑介（美術批評）、黒川紀章（建築家）、寺山修司（劇作家）、栗津潔（デザイナー）など。当時の執筆者では、武満徹（音楽家）、安部公房（小説家）、横尾忠則（美術家）などがいます。多様なジャンルの芸術家たちが志をひとつに総体となって動いていたかと思うと、身の引きしまる思いです。日本が高度経済成長期の真っただ中、文化と社会が互いに共鳴しあい、大きなうねりを作っていた時代です。

会社が軌道に乗りはじめた1980年以降はさらに出版路線を拡大し、実践的出版物の刊行に取り組みます。代表的な作品には、映画研究者の古典とされる『映画理論集成』、映画と他ジャンルのつながりを横断的に読み解いていく『Cine Lesson』シリーズ、世界的な脚本指南書として知られる『映画を書くためにあなたがしなくてはならないこと シド・フィールドの脚本術』があります。いずれの書籍もテーマの根底にあるのは、「読者や観客の能動的なリテラシーを推進する」ということ。単に「本を読む」「映画を観る」のではなく、受け手（読者）の参加を促し、思考を磨いていくことが、フィルムアート社の刊行物には過去から現在まで一貫してあるように思います。

昨年、会社創立50周年を迎えたのを機に記念冊子『かみのたねをまく』を社員全員で作りました。これまでフィルムアート社に関わっていただいた

方々に、弊社から刊行した書籍について、それに関わる様々な回想や追想を綴っていただきました。また、現役の書店員さんにもおすすめのフィルムアート社の書籍を紹介いただきました。無料配布とはいえ112ページからなる読み応えのある冊子です。



おもな執筆者は、蓮實重彦さん、四方田犬彦さん、中条省平さん、佐々木敦さんなど現在は批評家として第一線で活躍される方々。そして、廣瀬純さん（映画批評）、金子遊さん（映画批評）、水野祐さん（弁護士）、土居伸彰さん（アニメーション研究）といった今日のカルチャーをとりまく状況を担う気鋭の若手まで。本冊子を読んでい

ただくと、「フィルムアート社はどういう会社なのか」「フィルムアート社はどのような意図で本を作っているのか」が分かっていたかと思えます。

「かみのたねをまく」の全文は、ウェブサイトでも無料公開していますのでチェックしてみてください。 <http://filmart.co.jp/news/50th-2/>

本冊子の中で、批評家の金子遊さんはジョナス・メカス（映画監督）や松本俊夫（映画監督）との思い出を回想しつつ、こう締めています。「ひとつだけ確実にいえるのは、どんなときにも優れた書物との出会いが欠かせなかった、ということです」。

冒頭にも書きましたが、弊社が設立された1968年は文化と社会の躍動によって、大きなうねりを作っていた時代でした。過ぎ去った50年の年月は戻ることはありません。しかし現代を生きる私たちには、過去50年間に残された諸先輩方の思いを受け継ぎ、それを糧に新しい価値を生み出し、書物を通して広めていくことは可能だと思っています。

図書館という装置がいつの時代にも市民にとって不可欠な存在であるように、フィルムアート社も全国の読者にとって必要と思われる運動体になりたい、と。フィルムアート社に所属する一人の人間としてそう思っております。（おおば たけし：フィルムアート社）

科学の魅力を伝えるために ～「科学道 100冊」プロジェクト～

この9月26日、「科学道 100冊 2019」がリリースされました。

書籍を通じて科学者の生き方・考え方、科学のおもしろさ・素晴らしさを届けたいと、日本で唯一の自然科学の総合研究所である理化学研究所（理研）と、本の可能性を追求する編集工学研究所が手をとり、2017年に開始した「科学道 100冊」プロジェクトによるものです。

最初のプロジェクトでは、「科学道 100冊」を発表の後、子ども向けに「科学道 100冊ジュニア」も発表し、全国の書店や図書館、教育機関でフェアが開催されるなど大きな反響があったそうです。それを受けて、科学の魅力を多面的、継続的に伝えようと、毎年恒例の企画として再開した第一弾が、この「科学道 100冊 2019」です。

今回から、100冊の構成を「テーマ本」と「科学道クラシックス」に分け、それぞれ50冊を取り上げています。テーマ本はそのときどきに“旬”のテーマを3つ挙げるもので、今回は「元素ハンター」「美しき数学」「科学する女性」が掲げられました。科

学道クラシックスは、時代を越えて読み継ぎたいオールタイム・ベストの本50冊となっています。

選書にあたっては、理研の全職員を対象に、「大人になる前に出会ってほしい科学道の本」を募り、選書委員会で熱い論議を交わして選定されています。科学道を究めている研究者の方々と、書籍道を究めている松岡所長との、「この本には学生時代に

に出合って感激した」、「この本は子どものうちに出会ってほしい」など、うんうん、そうそう、と頷き合う会議の、何と楽しそうなこと！この選書会議の様子はプロジェクトの特設サイトに動画がアップされていますので、ぜひご

覧いただきたいと思います。

プロジェクトは、「科学道 100冊 2019」と「科学道 100冊ジュニア」を展示開催したい図書館・教育機関・各種団体を募集しています。参加団体へは、見出しやPOPなどの書棚ツール一式とブックレットが無償で提供されるそうです。詳細は「科学道 100冊」(<https://kagakudo100.jp/>)をご覧ください。

科学を通して、人間とは何か、生きるとはどういうことかを追究していく「科学道」に触れる機会を、ぜひ身近な中・高校生に与えていただけたらと思います。（LAS探検隊）

